

文学館だより

令和 4年 9月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高

8月20日～9月17日を「牧水月間」と日向市教育委員会が決めました。牧水・短歌甲子園から命日まで「牧水」と名のつく行事が続きます。歴史を刻み、後生へ繋げていきます。

第72回 牧水祭開催 3年ぶりに偲ぶ会を行います



3年ぶりにお客さまをお迎えした牧水祭が開催できそうです。この2年間は日向若山牧水顕彰会理事と事務局だけで歌碑祭のみを開催してきました。昨年は、地元の方の牧水短歌朗詠も、東郷学園生徒の巫女献酒も、坪谷小学校児童の牧水のうたもありませんでした。一昨年、あわや中止かという選択がよぎる中、「一度も欠かすことなく続けてきた牧水祭をここで途絶えさせる訳にはいけません。役員だけでも、献酒だけでも実施したい。」と那須会長が終始強く訴え続けました。

そして迎えた今年。制限は拭えないものの、牧水の命日に、お客さまをお迎えした第72回牧水祭をここ坪谷で開催する準備を進めています。

第72回牧水祭

主催 日向市・日向市教育委員会・日向若山牧水顕彰会
期日 9月17日(土) 牧水の命日 没後94年 雨天決行 荒天の場合は順延
場所 牧水生家周辺及び牧水公園ふるさとの家
受付 9:00～ 牧水生家駐車場

第1部 歌碑祭 9:30～10:00 牧水生家夫婦歌碑前

歌碑前において短歌朗詠、献酒

第2部 牧水を偲ぶ会 10:20～12:30 牧水公園ふるさとの家

牧水のうた斉唱 坪谷小学校児童

鼎談 牧水と書家榎倉香邨を偲ぶ『～牧水短歌が紡いだ牧水と香邨』

岩永栖邨氏(書家、書道香環会理事長)

伊藤一彦氏(歌人、若山牧水記念文学館長)

那須文美氏(日向若山牧水顕彰会長)

懇談会は実施しません。

ただし、昼食時間帯となることから弁当を販売します。(要予約)

どなたでも参加できますが、コロナ感染拡大防止対策から、参加人数を120名と制限させていただきます。事前申し込みが必要です。詳細は文学館までお尋ねください。 0982-68-9511

9月の主な企画等のご案内

第10回高森文夫を偲ぶ詩大会作品募集(市内小学校4～6年生)～9/30(金)
企画展 榎倉香邨遺作展(企画展示室)～9/30(金)
新規収蔵遺墨展2(常設展示室) 9/4(日)～11/27(日)

新規収蔵遺墨展2では、昨年新たに収蔵した牧水遺墨の中から掛け軸、色紙、短冊6点を披露いたします。

新規収蔵遺墨展1で紹介した『幾山川～』に続き、比較的目にする事の少なかった作品が登場いたします。

牧水ファンの皆さま、ぶらっと行ってみようかというお近くの方、どうぞお越しください。お待ちしております。

新規収蔵遺墨展より



第46回 牧水かるた大会

こちら3年ぶりの開催でした

日向市教育委員会主催、日向市内小中学生を対象とした牧水かるた大会が8月23日(火)日向市文化交流センターで行われました。チーム対抗戦、個人戦に牧水短歌100枚のかるたとり137名の児童生徒が参加しました。

目に留まったのは個人戦。個人戦ですから、ひとりで100枚取りに挑むのです。

中学生の部で100枚取り達成がなんと2名!!

しかもその2名は牧水の母校坪谷小学校の卒業生でした!!!

大会の詳細は日向市教育委員会にお尋ねください。0982-52-2111

これまでかるた大会は冬休み開催でしたが、本年度から生誕の日(8月24日)に合わせて開催することです。



後日談：かるた大会会場にいた知人からこのような知らせが・・・

「かるた大会の会場に大きな黒い蝶々が1羽。あれは牧水先生だったのかなあ と。」

第12回 牧水・短歌甲子園

3年ぶり対面開催

第12回牧水・短歌甲子園が8月20(土)～21(日)日向市中央公民館にて開催されました。過去最多60チームの応募、3年ぶり会場での対面開催とあって感動の2日間となりました。

【団体戦】

優勝 宮崎県立宮崎西高等学校・・・出場回数10回目 優勝4回目、準優勝4回

準優勝 宮城県気仙沼高等学校・・・初出場

第3位 宮崎県立宮崎商業高等学校・・・出場回数10回目 優勝1回、準優勝1回、3位5回目

第3位 筑波大学附属高等学校・・・初出場

【個人賞】

【若山牧水記念文学館長賞/館長 伊藤一彦】筑波大学附属高等学校	酒井宏太郎
モータルな隙間デパートの紙袋だけ詰め込んで隠そうとする	

【俵 万智賞】宮城県気仙沼高等学校	及川 舞
初恋はレモンの味だと言うけれどシチリアですか瀬戸内ですか	

【大口玲子賞】大阪府立咲くやこの花高等学校	薬丸 涼花
青空に背筋伸ばした整列の制服は白夏雲は白	

【笹 公人賞】延岡学園尚学館高等部	茶園 七海
夏祭り恋に落ちゆく友を見て しぼんだヨーヨー吊り下げ帰る	

大会の詳細につきましては若山牧水ホームページ <https://www.bokusui.jp> をご覧ください。

「高校生の歌を評価するというより歌人として本気になってしまう。」と大口玲子さん。笹公人さんも「水準が高く、審査の目が問われ緊張感が増してきている。」とおっしゃるほどレベルが上がっていると高い評価で終わった本大会。2日間にわたり連続15試合の審査をされた審査員の先生方は、甲乙つけがたい拮抗する対戦に大変お疲れのようでした。

また、「この2日間で半年分の短歌の実作と理論の勉強できた。」「近年若い人が短歌に熱心である。牧水の時代、明治30年代も若い人の短歌ブームがあり、歌人が次々と誕生した。この頃と似ているかもしれない。」との伊藤先生の発言は印象的でした。

俵万智さんの言葉では、「自分が発した短いことばがどう読まれるのかという想像力をもつこと、また短い言葉を受け取った時に、自分はその背景をどう想像力をもって読めるか、生きる力を養うことになる。」が響きました。

2日間の模様はYouTubeにて配信中です。覗いてみませんか。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草をぬくこの庭草を

急性腸胃炎兼肝臓硬変症で重態になった牧水が亡くなったのは、昭和3年9月17日。43歳の牧水は、末期の水の代わりに酒で口を湿されながら、苦痛もなく静かに息を引き取ったという。この歌は、牧水没後に机辺から見つけ出されたものである。みずからの命があと少しだということ、牧水は知っていたのかどうか。庭草を抜く姿は寂しく痛々しい。

『短歌の意味がすぐわかる！ 名歌即訳 若山牧水』大谷和子著より